

座談会 道教美術研究の現在—大阪からパリへ

山下一夫

一、はじめに

2010年3月31日から7月5日にかけて、フランス国立美術館連合(Réunion des musées nationaux)とギメ東洋美術館(Musée national des arts asiatiques Guimet)の共催で、パリのグランパレ(Grand Palais)で「タオの道——存在へと至るもうひとつの道程」特別展(La Voie du Tao, un autre chemin de l'être)が開催された。この特別展を参観し、あわせてフランスとの学術交流を図ることを目的として、平成22年度科学研究費補助金基盤研究(B)「中国道教における山岳信仰と宗教施設のネットワークに関する総合的調査と研究」(研究代表者:土屋昌明)によって、2010年5月30日から6月5日の日程でフランス出張を行った。

これについてはすでに、「フランス国立美術館連合・ギメ美術館共催『タオの道——存在へと至るもうひとつの道程』特別展および座談会報告」として『東方宗教』で報告を行ったが^{*1}、その際は出張全体の概略を記すのみで、特に座談会「道教美術研究の現在——大阪からパリへ」(Daoist Art Exhibitions: from Osaka to Paris)については簡単に触れるに留まった。しかしこの座談会は、文物・美術面からの道教研究について日仏の若手・中堅研究者が集まって意見交換を行った、重要な会合となったと認識している。

そこで本稿では、この座談会について詳細な報告を行うとともに、そこで提起された幾つかの問題について纏めておこうと思う。なお文中では人名は敬称略とし、発言などについては大意を要約して示したが、内容についてはあくまで筆者の理解に基づく点、あらかじめご了承ください。

注1…『東方宗教』第116号(日本道教学会、2010年)、pp103～108

二、参加者

日仏共同の座談会「道教美術研究の現在——大阪からパリへ」は、2010年6月1日の10:30から12:30まで、パリのフランス極東学院会議室で開催された。日本側の参加者は以下の通りである(着席順、括弧内は当時の所属)。

土屋昌明(専修大学)／横手裕(東京大学)／大形徹(大阪府立大学)／鈴木健郎(専修大学)／山下一夫(神田外語大学)／森瑞枝(國學院大学)／丸山宏(筑波大学)／二階堂善弘(関西大学)

座談会開催にあたって日本側が用意・配付したのが、渡仏直前に出版にこぎ着けた道教美術の論集『道教美術の可能性』である^{*2}。本書は日本側参加者

座談会の様子

司会のピエール・マルソン
(右) ほかフランス側参加
者。

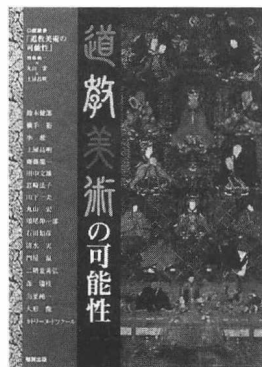


の全員が執筆に関わっただけでなく、グランパレで開催中の特別展「タオの道——存在へと至るもうひとつの道程」について記したカトリーヌ・ドラクール
の文章も収録している。全体の構成は以下の通りである。

注2… 齋藤龍一・鈴木健
郎・土屋昌明共編、アジ
ア遊学 133、勉誠出版、
2010年。

「道教美術の可能性」に寄せて(土屋昌明)／「道教美術の可能性」座談会(齋藤龍一・土屋昌明・丸山宏)／「道教美術」とは何か(鈴木健郎)／道教の歴史(横手裕)／漢代銅鏡にみえる神話および道教の図像について(李淞)／道教美術における文字の問題(土屋昌明)／道教像のすがたとひろがりー南北朝～唐時代(齋藤龍一)／中世道教の法服と法具(田中文雄)／中国絵画と道教——宋元時代を中心として(宮崎法子)／明清小説の版画に見える道教神——三清と如意(山下一夫)／道壇と神画(丸山宏)／日本の君王、道士法を崇めず——古代日本における道教と文物の受容(増尾伸一郎)／日本の中世仏画にみる道教(石川知彦)／神道図像と道教美術の関わり——「道教の美術」展を経て(清水実)／馬に跨る女神はどこから来たか——神道図像と道教をめぐって(門屋温)／日本渡来の人々の神々(二階堂善弘)／平田篤胤と「五岳真形図」(森瑞枝)／琉球の呪符(山里純一)／朝鮮半島における道教美術(土屋昌明)／古代オリエントと道教美術(大形徹)／ギメ東洋美術館・フランス国立美術館連合主催「タオの道——存在へと至るもうひとつの道程」(カトリーヌ・ドラクール)

『道教美術の可能性』



またフランス側参加者は以下の通りである(着席順、括弧内は当時の所属)。

ピエール・マルソン (Pierre MARSON、フランス高等実践学院)／フランソワ・ラショー (François LACHAUD、フランス極東学院)／ヴァンサン・ゴーセール [高万桑] (Vincent GOOSAERT、フランス国家科学研究センター、フランス高等実践学院)／カロリーヌ・ジス (Caroline GYSS、フランス国家

科学研究センター、フランス高等実践学院)／張恵明(Zhang Huiming、フランス高等実践学院)／潘君亮(Julien Pan、フランス国家科学研究センター、フランス高等実践学院)／方玲(Fang Ling、フランス国家科学研究センター、フランス高等実践学院)

座談会でフランス側から提示されたのが、ゴーセールとジスの共著“*Le Taoïsme, La révélation continue*”である^{*3}。これはその後、2011年1月に『道教の世界——宇宙の仕組みと不老不死』として日本語訳が刊行された^{*4}。

本書は「道教の歴史」「道教の宇宙論と宗教儀礼」「人体の仕組みと不老不死」「道教と中国社会」の四章から成り、道教の全体像をコンパクトに纏めている。類書に無い大きな特徴としては、写真や図像がカラーで多数掲載されていることが挙げられる。これは本書が「ビジュアルな学術入門書」をコンセプトとする“Découvertes Gallimard”のシリーズの一つとして刊行されたためという事情もあるが、それだけではなく、図版の多用は著者たちの道教へのアプローチに基づく、関心のあり方が背景にあるように思う。

一つは、著者たちの道教美術研究への関心である。一方の著者であるジスは、1984年に“*La vie et l'oeuvre de Huang Gongwang (1269 ~ 1354)*”(『黄公望の生涯と作品』)^{*5}という、画家で全真教の道士でもあった元の黄公望の研究を発表している。2000年にシカゴで開催された「道教と中国美術」特別展が呼び水となり、各国で道教美術への関心が高まったことについてはすでに報告があるが^{*6}、ジスはそれ以前の早い段階からこの分野に分け入ってきた研究者である。また日本語で読めるジスの論文として、ギメ美術館所蔵のペリオ招来水陸画を検討した「明景泰5年在銘「水陸齋図」をめぐる図像学的考察」^{*7}があるが、この論文が示すように、パリには質の高い図像資料が大量に収蔵されており、それが道教美術研究に向かわせる環境を形成している。本書が多数の文物の写真を収録できたのも、またそもそもグランパレの特別展を開催したこと自体も、こうした収蔵物あつてのことだろう。

またもう一つは、「今現在、中華圏で生きて動いている道教」に対する関心である。本書中に収録されている多数の道観や道士、儀礼などの写真は、単に眼を愉しませるためではなく、「道教はこうして同時代的に人びとの営みとして存在しているのだ」と読者に提示する意図があるように思う。本書のもう一人の著者であるゴーセールは、“*The Taoists of Peking, 1800-1949: A Social History of Urban Clerics*”(『北京の道士 1800 ~ 1949』)^{*8}や、“*The Religious Question in Modern China*”(『近代中国における宗教問題』、デビット・A・パーマーとの共著)^{*9}などの著作があり、また中国語では「近代中國的國家與宗教：宗教政策與學術典範」^{*10}を発表しているが、これらはいずれも近現代における道教、特にその国家や社会との関係を扱った研究である。この分野は従来の

注 3…Vincent Goossaert et Caroline Gyss. Gallimard : *Réunion des musées nationaux religions*, Editions Gallimard, 2010.

注 4…松本浩一監修・遠藤ゆかり訳、創元社「知の再発見」双書 150。

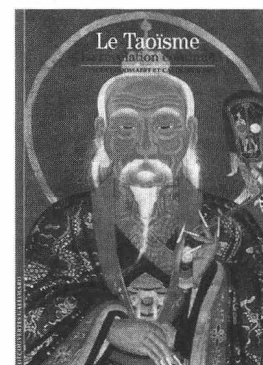
注 5…Collège de France, Institut des hautes études chinoises : Diffusion, De Boccard, 1984.

注 6…土屋昌明「道教美術研究の若干の近況について」、『東方宗教』第115号(日本道教学会、2010年)、pp100-110。

注 7…明神洋訳、『仏教芸術』215号(毎日新聞社、1994年)、図巻頭 pp8-9、本文 pp104-124。

注 8… Vincent Goossaert, Harvard University Asia Center, 2007.

“*Le Taoïsme, La révélation continue*”



注 9… Vincent Goossaert and David A. Palmer, University of Chicago Press, 2011.

注 10… 黄郁璇訳、『中央研究院近代史研究所集刊』54（中央研究院近代史研究所、2006 年）、pp169-209。

注 11… 大阪市立美術館・読売新聞大阪本社共催、2009 年 7 月 11 日～9 月 6 日東京三井記念美術館、9 月 15 日～10 月 25 日大阪市立美術館、2010 年 1 月 23 日～3 月 22 日長崎歴史文化博物館。カタログとして『道教の美術 TAOISM ART』（読売新聞大阪本社、2009 年）が出版された。なお三会場のうち大阪が最も展示数が多く、規模も大きかったため、座談会では「大阪」で当該展覧会を代表させている。

注 12… 土屋昌明「『洞天福地』の研究について——序論にかえて」（本誌第 1 号、pp3-9）参照。

注 13… Kadoya Atsushi, "On the Formation of Shinto Icons", *Cahiers d'Extreme-Asie* No.16, 2006-2007, pp151-182.

道教研究では手薄だったと言えるが、現在の道教のあり方にダイレクトに繋がる重要な課題であり、そうした問題意識も本書の「ビジュアル性」の背後にあると見て良いだろう。

三、討論

座談会は、マルソンおよび土屋が司会を務める中、日本側によるプレゼンテーションと、それに対するフランス側からの議論という形で行われた。まず土屋が、(1) 2009 年に大阪で開催した「道教の美術」展覧会^{*11}、(2) 取得している科学研究費基盤研究 (B)「中国道教における山岳信仰と宗教施設のネットワークに関する総合的調査と研究」と、それによって行った洞天調査^{*12}、(3)『道教美術の可能性』の出版、の三点について概略を説明した後、以下の議題に入った。

(一) 日本の道教美術のタイプ（土屋）

大阪で開催した「道教の美術」展覧会出品資料を以下の 3 種類に分け、それぞれ代表例とその特徴について述べた。

(1) 近代以降日本に将来された道教の文物

◎大阪市立美術館所蔵、北魏・道教造像（『道教の美術 TAOISM ART』No.066～No.070）。道教と仏教が融合した作例の一つであり、北朝道教史研究において従来の文献的アプローチのみでは解らない部分を考究する材料となる。

(2) 近代以前に日本に将来された道教文物

◎奈良・法隆寺所蔵、元・天尊像（『道教の美術 TAOISM ART』No.081）。収蔵に至った経緯は不明。

◎滋賀・宝厳寺所蔵、南宋・北斗九星図（『道教の美術 TAOISM ART』No.191）。当該資料は南宋皇室の北斗信仰と関連がある可能性を指摘。

◎京都・高麗美術館所蔵、朝鮮・熾盛光如来図（『道教の美術 TAOISM ART』No.220）。1569 年のもの。玉皇大帝や月太陰、天皇大帝などが描かれている。

(3) 日本文化に融合した形であられる道教

◎滋賀・西教寺所蔵、山王垂迹曼荼羅（『道教の美術 TAOISM ART』No.123）。これについては門屋温の論考があることを紹介^{*13}。

(二) 日本で土着化した道教的要素（森）

(一) の (3) を受けて、日本思想史を専攻する森が話を継いだ。

◎日本文化に融合した形であられる道教は、基本的に「神仏習合」の問題と関わる。神仏習合の立場においては、神道の「神」と外来の「仏」の関係をどのように説明するかが一貫した課題であったし、それは研究者にとっては中国や朝鮮の宗教文化が日本のそれとどう関わってきたのかという問題となる。

◎神道における道教的要素は、「日本には道教が入って来なかった」という思い込みもあって、長らく等閑視されてきた。しかしこの10年ほどで神道絵画への密教図像の影響の研究が進展し、その中で密教だけでは説明しきれない要素を道教に求める動きが門屋を中心に起こった。その研究の成果は、大阪の「道教の美術」展覧会における神道関連の展示にも反映されている。

◎ただこの問題を考えるにあたっては、例えば美術史の立場ではモチーフによってある部分は道教的要素が材料だと判別できても、思想史の立場からはさらにそれがどのような意味を持っていたのか、またそうした材料の利用がどの程度の「深さ」まで行われていたのか、といった課題を検討しなければならない。そうした点において現状では、研究はまだ始まったばかりだとも言える。

(三) 日本の道教美術の特徴と課題（丸山）

(一)(二)を受け、日本の道教美術の特徴と課題について、丸山が総括的な話を述べた。

◎道教の神像ということ言えば、例えば禅的な老子の図像はあっても、道教の信仰の対象としての道德天尊・太上老君像は日本では行われなかった。これは、道教の核心的部分は拒絶し、知識人の好む禅的な哲学的部分などを「選択的に」取り込んでいった結果であり、日本における道教美術、さらには道教受容のあり方の一つの特徴でもある。

◎日本の神道や宗教美術の研究者が、神道や密教だけでは解決できない部分を検討し、そこに道教から選択的に取り込んだ要素を認めたとしても、われわれ道教研究者の側では、道教美術本体の理解がまだ十分に蓄積されていないため、対応する道教の文物や図像を常に提示できる状況には無い。したがってわれわれは、多くの文物資料に接する必要がある、今回のグランパレの特別展の参観はそうした点でも有益である。

(四) フランス側との対論

以上の日本側の発表に対して、フランス側からさまざまな意見が提出された。以下にその要点を纏める。

◎清末民国における日本人収集資料の活用について

注 14…本文編 1 冊・図版編 3 冊、吉川弘文館、1995 年。

注 15…1870 年～1945 年。1920 年代に数度中国で調査を行った。著書に『支那仏教史蹟』（関野貞との共著、仏教史蹟研究会、1925 年）、『支那文化史蹟』（関野貞との共著、法蔵館、1939 年）、『支那仏教の研究』（正・続・第三、春秋社松柏館、1938 年）など。

注 16…1871 年～1949 年。1906 年から 4 年間陝西省で調査を行った。著書に『長安史蹟の研究』（東洋文庫、1933 年）・『法顕伝 中亞・印度・南海紀行の研究』（法蔵館、1940 年）・『大唐西域記の研究』（法蔵館、1942 年）など。

ゴーセール：清末から民国にかけて、多くの日本人が中国に行き、道教の廟や文物などの写真を撮影している。実物はその後、破壊されたり無くなってしまったものも多く、そうした写真は現在では大変貴重な資料となっていると思う。それらは現在どこに所蔵されているのか、またそうした資料を用いた系統的な研究は行われているのか。

丸山：松原三郎『中国仏教彫刻史論』*¹⁴ は仏教美術の研究書だが、その中に道教を扱う章があり、そうした写真がある程度収められている。

土屋：ほかに元朝の全真教の竜山石窟を扱った研究などもあり、それでは破壊される前の比較的完好な像を見ることができるとは思うが、いずれも部分的なものであり、系統的には行われていない。そうした常盤大定*¹⁵ や足立喜六*¹⁶ など、戦前に中国で調査を行った研究者の収集資料が、現在どこに所蔵されているのかは把握できていないが、これは今後の課題とすることができよう。それはフランスも同じことが言え、例えば同様の記録を残したシャヴァンヌやセガレンらの資料は、写真についてはギメ東洋美術館によって公開されているが、拓本やその他の資料は閲覧する便宜が整っていないように思われる。

◎日本の寺社仏閣に所蔵されている未発見の文物資料について

マルソン：日本の寺社の中には、未発見の道教美術関係文物資料がまだたくさんあるのではないだろうか。それらを今後探して行くことも必要であると思う。

土屋：大阪の「道教の美術」展覧会で展示品を収集した経緯を考えると、日本の寺社に所蔵される道教美術関係文物は、おおむね以下の二種類に分類できる。一つは、従来仏教美術の範疇の作例と思われてきたもの。もう一つは、そもそも人々がそこに道教という要素を見出していないもの。いずれの場合も、所蔵する当事者は文物の性質に無自覚で、研究によってはじめて道教との関連が理解された。未発見の文物についても当然、同様の問題があると思う。

◎図像の用途について

潘：三官大帝など、道教の要素が入っている神道絵画の作例があるということだが、そうした図像はどのような用途で使われたものなのか。儀礼に用いられたのだとすれば、（中国でいう）科儀書のような儀礼文献中に、そうした道教神の名前を見出すことができるのか。

土屋：日本の神道の儀礼文献の中には、そうした例は無いと思う。

丸山：京都には「地獄の入り口」と信じられている六道珍皇寺があり、ここで行われている施餓鬼の儀礼などは、そうした意味で研究してみる価値があ

るかも知れない。

二階堂：三官大帝は、長崎の唐寺で媽祖・関公と一緒に祀られている例があるが、他の場所では見たことがない。一般の日本人は、三官大帝と言っても解らないと思う。

森：神道の道教関連図像については、一部が中世の前半、11世紀から14世紀のころ寺院の中で行われた秘密の儀礼と関係することが、最近の研究で解ってきている。また、いわば上部構造に属する中世のそうした要素は、江戸時代、17世紀以降に今度は大衆化し、下部構造でも行われていったが、それは施餓鬼会や六道珍皇寺のように、地獄絵図の中に取り込まれたものが多い。個人的には、神々の姿や地獄の様子などを具体的に思い浮かべるのに、道教のイメージが役に立ったからではないかと思っている。

◎「生きて、動いている道教」として

ジス：道教美術という分野は、2000年のシカゴの展覧会以来、各国で研究が進んできたが、今回日本側との意見交換によって、日本にも非常に多くの文物が収蔵されていること、また日本に根付いたものがあることを知った。特に後者は我々にとって未知の分野であり、道教美術の新たな研究の可能性を感じるとともに、日本の「道教の美術」展覧会がそれを「今も日本で生きて動いているもの」として提示したことを、大いに評価したい。というのは、フランスでは一般に道教を道家思想と混同する傾向があるが、我々はそうした従来のステレオタイプを訂正し、「今生きて動いている宗教」としての道教の姿を一般に伝えたいという意図のもとで、“*Le Taoïsme, La révélation continue*”を執筆し、またグランパレの特別展を開催したからだ。そこで日本の展覧会について聞きたいのだが、展示に対する一般の反応はどのようなものだったのか。

森：道教美術という分野があることにはじめて気が付いた、という反応が最も大きかった。また、日本の中にこれだけの道教文物があったということに、一般のみならず、研究者も驚かされたという性質があったと思う。

四、おわりに

座談会におけるフランス側の関心は、(1)日本にも道教美術関連の文物が多数所蔵されていること、(2)またそれが多く神道との関連で展開したものであること、の二点に比較的集中していたように思う。前者については、日本の多くの研究者も大阪の展覧会で同じ感想を持ったので、いわば共通した認識であろうと思われる。また後者については、欧米の道教美術研究の中ではほとんど知られていなかった分野であり、それをフランスの研究者たちと共有できたことは、座談会の成果であろう。そしてそれは同時に、これが道教美術研究

の中で日本の研究者が貢献し得る重要な分野であることも示していると思う。

2000年のシカゴの展覧会以来、道教美術研究は次第に盛んになってきた。しかし研究対象とする文物が各国に分散しているという問題もあり、これを世界的な流れとするには、各国の研究者が連携していく必要がある。座談会の日本側参加者は、多くが2009年の日本の「道教の美術」展覧会図録解説に関わっただけでなく、中国でこの分野の研究をリードする北京大学の李淞の招聘も行っている。今回の渡仏も、グランパレの特別展を参観して実物の資料に接することはもちろん重要だが、それと同時にパリの研究活動と歩調を合わせる必要性を認識していたことも理由としてあった。そうした中で、座談会の開催は重要な役割を果たし得たのではないだろうか。

グランパレ前に飾られた
「タオの道——存在へと至
るもうひとつの道程」特別
展ポスター

